

# 『大乘莊嚴經論』 発心品の一考察

舟 橋 尚 哉

『大乘莊嚴經論』の第四章発心品(cittopādāhikāra)は菩薩の發菩提心の問題を論ずる重要な章であると思われる。初めに發心の特質(cittopāda-takṣaṇa)について説かれているが、第二偈においては發心の差別(cittopāde prabheda)が説かれ、發心と十地の關係が明確化されている。

「かの發心(cittopāda)は諸地において、(一)信解なるものと、また(二)清淨なる増上意樂なるものと、(三)異熟なるものと、同様に(四)障を離れたものであると考えられている」(第二偈)と説かれ、世親釈には次の如く説かれている。

「諸菩薩の發心は四種である。(一)信解行地における信解なるものと(二)七つの地における清淨なる増上意樂なるものと(三)第八地等における異熟なるものと(四)仏地における無障なるものである」いまこれらの菩薩の發心を『瑜伽論』の上で見ると、宇井博士も闡説しておられるように、『瑜伽論』卷三十七の成熟品には次の如き記述が見られる。

「その中、成熟せしめる諸のプトガラ(puṅgala)とは如何ん。

略して六種である。菩薩の六つの地に住する諸菩薩は諸衆生を成熟させる。

(一)勝解行地に住する勝解を行ずる菩薩と、

(二)清淨なる勝意樂の地に住する、清淨なる勝意樂の菩薩と、

(三)正行を行ずる地に住する、正行を行ずる菩薩と、

(四)決定地に住する、決定に墮する菩薩と、

(五)決定して正行を行ずる地に住する、決定して正行を行ずる菩薩と、

(六)究竟に到達する地に住する、究竟に到達した菩薩とである」

ここには六種の菩薩として(一)勝解を行ずる菩薩(二)清淨なる意樂の菩薩(三)正行を行ずる菩薩(四)決定に墮する菩薩(五)決定して正行を行ずる菩薩(六)究竟に到達した菩薩が説かれている。また『瑜伽論』卷四十九地品には次の如く説かれている。

「これらに説かれた如き十三住に隨行した七つの地は知るべきである。六種の菩薩地と、一「種」は混合した菩薩・如来地である。(一)種性地と、(二)勝解行地と、(三)清淨なる勝意樂地と、(四)正

『大乘莊嚴經論』發心品の一考察(舟橋)

行を行ずる地と、(四)決定地と、(六)決定して行ずる地と、(七)究竟に到達した地と、これら七つの菩薩地がある。これらの最後「の地」は雑地である<sup>(2)</sup>

『瑜伽論』の六種菩薩・七種菩薩地に関連させて『大乘莊嚴經論』の四種の菩薩の発心を考えるならば、次の如くなるかと思う。(便宜上、漢訳を用うることにする。)

七種菩薩地の(一)浄勝意樂地は極歡喜地とあるから初歡喜地に相当すると考えられ、(四)行正行地は有功用・無相住とあるから第二地と第七地に相当し、これらは『莊嚴經論』の四種

瑜伽論卷三十七

(六種菩薩)

- (一) 勝解行菩薩……………
- (二) 浄勝意樂菩薩……………
- (三) 行正行菩薩……………
- (四) 墮決定菩薩……………
- (五) 決定行正行菩薩……………
- (六) 到究竟菩薩……………

瑜伽論卷四十九

(七種菩薩地)

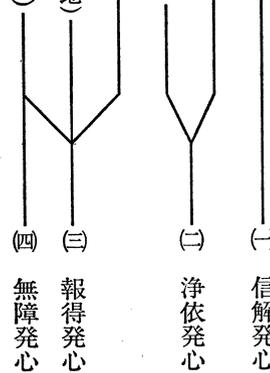
- (一) 種性地……………
- (二) 勝解行地……………
- (三) 浄勝意樂地(初地)……………
- (四) 行正行地(第二地—第七地)……………
- (五) 〔墮〕決定地(第八地)……………
- (六) 決定行〔正行〕地(第九地)……………
- (七) 到究竟地(第十地・如来地)……………

發心では(一)浄依發心の七つの地に対応している。また(四)決定地は無功用・無相住とあるから第八地に相当し、(六)決定行〔正行〕地は無礙解住とあるから、第九地に相当すると考えられ、これは(三)報得發心に対応している。(七)到究竟地は第十地であるとともに如来地でもあるから、(三)報得發心と(四)無障發心とに対応する。

この他、發心品には宇井博士も指摘されているように、『十地經』(Dasabhumikasūtra)との關係を示す興味ある記述がある。すなわち、第十二偈a—bには、

『大乘莊嚴經論』第四章發心品

(四種の發心)



〔一〕内は瑜伽論卷三十七  
〔二〕内は宇井博士の註参照

audaryam vijñeyam prañihānamahadaśabhīrharatī |<sup>(92)</sup>

とあり、prañihānamahādāśa (大なる十種の願) となつてゐるが、世親釈には dasamahāprañihāna (十の大願) となつてゐる。この方が自然の形であり、『十地経』の梵本にも<sup>(93)</sup> dasamahāprañihānamukhami となつてゐる。もっともその直後では mahāprañihānāni dasābhir となつてゐるが、これは dāśa が rombawanda で続いてゐないからであり、従つて rombawanda にすれば dasamahāprañihāna という形が自然だと思ふ。このように『莊嚴経論』の梵本と『十地経』の梵本とは同じ用語であり、更に漢訳には「如十地経説」(大正三一、五九六b) とあるように、この所説が『十地経』との関連で説かれてゐることは明らかである。

このように発心品は菩薩の發菩提心を説く重要な章であると思われるが、比較的短い章(梵本六頁)であるにもかかわらず、どういふわけか Lévi 本のテキストには間違ひが多い。Lévi のテキスト自体が間違つてゐるため、宇井博士も「梵文に (sk. p. 17, l. 9) に aksagata とあるのがよくは判らない」とつておられるが、ここはネパール写本並びにチベット訳を見れば容易に解決する問題である。そこで発心品の思想を考察しながら、特に Lévi 本のテキストの中で訂正すべき点を指摘していきたいと思ふ。

まず初めに発心の決択 (cittotpādaviniscaya) に関する四偈

『大乘莊嚴経論』発心品の一考察(舟橋)

の中の第二番目の偈、すなわち第四偈の Lévi 本 p. 14, l. 12 の praiṣṭhā sīlasamvṛtīh であるが、Ns 本 (13b, l. 4) の Nc 本 (11b, l. 2) もそれぞれ praiṣṭhodārasamvṛtīh となつてゐる。sīla ではなく udāra である。チベット訳は rgya chen (影印北京版 61—2—4、テルゲ版 139b) であるから、これも udāra の訳であろう。ここは偈頌であるので韻律の上からも考察しなくてはならぬ。Lévi 本の 4 本の praiṣṭhā sīlasamvṛtīh とも、訂正後の praiṣṭhodārasamvṛtīh とも、sloka の第一形式 pathya と合致しているから、シラブルの上からは全く問題がない。それでは Lévi は何故 sīla と読み間違えたのであろうか。Ns 本 (13b, l. 4) の上は dāra の r の下に写本では五行目の 'sau の二重母音記号の斜線があり、一見 r と斜線とが結合して ra に見えるため sala か dala のように見える。Lévi はおそらく長行の sīlasamvārapra-tiṣṭhāh (sk. p. 14, l. 22) とあるのを見、sīla と解したのであなからうか。しかし長行のチベット訳は tshul khriims (影印北京版 61—e—1、テルゲ版 139b) であるから sk. sīla や rgya chen が、偈のチベット訳は rgya chen であるから当然サンスクリットも udāra が想定される。しかもネパール写本には udāra とあるのであるから、r の sīla は udāra に訂正すべきであらう。

次に発心の決択 (cittotpādaviniscaya) に関する四偈の中の

第一の偈、すなわち第三偈の長行に相当する Lévi 本' p. 14, 1.21 の *tajjananaparyesiṅkāreṇa tajjanālambanatī* とあるが、Ns 本 (14a, 1.1) と Nc 本 (11b, 1.6) と *tajjananaparyesiṅālambanāḥ paryesiṅkāreṇa tajjanālambanatī* となつてゐる。それではチベット訳 (影印北京版 61—2—8、テルナ版 139b) はどうかといふことは、

dehi ye ses la tshol bar dmiṅs pa ste | dehi  
ye ses la tshol bahi mam par dmiṅs paḥi phyir ro ||

となつてゐて明らかだ *ālambanāḥ paryesiṅ-* に相当する語が見出される。従つて *ālambanāḥ paryesiṅ-* を補つて読むべきであらう。

また受世俗 (*samādānasamketika*) の発心 (*cittoṃpāda*) に関する偈、すなわち第七偈の長行の Lévi 本' p. 15, 1.4 の *iva* であるが、Ns 本 (14a, 1.6) と Nc 本 (12a, 1.3) と *eva* となつてゐる。チベット訳 *tshé hdi hīd* (影印北京版 61—3—7、テルナ版 140a<sup>2</sup>) と *hīd* が *eva* から、Bagchi 本 (p. 16, 1.13) は *iva* の *ま* まで *は* あるが、*iva* は *eva* と訂正した方がよいと思ふ。

その直前の Lévi 本' p. 15, 1.3 の *vāṭṭa* とあるが、これは長尾博士がチベット訳によつて訂正されたところのように *vā tadgotra* の方がよい。なぜなら、Ns 本 (14a, 1.5) は不鮮明ながら一応 *vā tadgotra* と読めるし、Nc 本 (12a, 1.2) は

*vā tadgotra* のように見える。しかもここは長尾博士も指摘されたようにチベット訳が *dehi rigs* (影印北京版 61—3—6、テルナ版 140a<sup>1</sup>) とあるのだから、当然 *tadgotra* が想定される。従つてここは長尾博士の訂正によることがネパール写本の上からも裏づけられたといふやう。

次に譬喩の偉大についての六偈の中の第二偈、すなわち第十六偈の Lévi 本' p. 16, 1.7 の *bhūyo* とあるが、Ns 本 (15a, 1.6) では *jñeyo* となつてゐる。Nc 本 (12b, 1.9) では *ieyo* に見えるが *jñeyo* とある。チベット訳 *ses bya* (影印北京版 61—5—5、テルナ版 140b) となつてゐるから、やはり *jñeyo* の訳のようである。ここは偈頌であるので韻律も考えなくてはならない。この偈は *arya* 調の偈であるから、*bhūyo* を *jñeyo* に訂正してもシラブルの点からは全く問題がない。

更にこの第十六偈には *ses bya* の個所が二ヶ所あり (影印北京版 61—5—5 と 6、テルナ版 140b<sup>5</sup>, 140b<sup>6</sup>) 十六偈 *bya* には *sk. jñeyo* となつてゐる。従つて第十六偈 *bya* と *sk. jñeyo* の可能性が強ふと思われる。それ故、*iva* の *bhūyo* は *jñeyo* に訂正すべきであると思ふ。

この第十六偈の長行の Lévi 本' p. 16, 1.24 の *sarvāṅst-ōparipatīr* とあるが、宇井博士は「一切の非可愛事が落ちかかつて」(宇井博士著八八頁参照) と訳しておられる。

しかし *upanipāta* と同じのは少しおかしい用語だと思つて調べて見ると、Ns 本 (15b, 1. 6) は明らかに *upanipāta* となつてゐる。Nc 本 (13a, 1. 8) は *upanipāta* か *uparipāta* かはよくわからぬが、チベット訳は *hbyun ba* (影田北京版 92-1-5、チルゲ版 141a) とあるから、*utpanna* とか *utpāda* とか「生ずる」の意であり、*upanipāta* (生ずる) の意に近う。

更に *uparipāta* を *upanipāta* に訂正する根拠を見出すところと思つ、宇井博士の「梵漢対照菩薩地素引」に *upanipāta* の用例があるかどうかを調べて見た。(勿論、*uparipāta* と同じ用例はなう。) なるより、三ヶ所見出される。荻原本の sk. p. 245 では 1. 23 *dāridryōpanipāta* とあるが、1. 24 では *daurba-lyōpanipāta* とあるが、sk. p. 251, 1. 6 では *duḥkḥōpanipāta* (苦を生ずる) となつてゐる。しかもこの用例は *anistōpanipāta* (非愛を生ずる) もチベット訳には *nam na ba hbyun ba* (辛苦を生ずる) と訳られてゐるから、これらの瑜伽論菩薩地の用例と非常によく似てゐる。従つてこの *uparipāta* は *upanipāta* に訂正すべきであると思ふ。(ただし瑜伽論の *duḥkḥōpanipāta* の *upanipāta* は相対してチベット訳は *phrad pa* (チルゲ版 133b) や、その他の *upanipāta* は *hegur* (チルゲ版 131a, 131a) とあるから、このチベット訳 *hbyun ba* と必ずしも一致しないから)。

このすぐ後の第十九偈の長行の Lévi 本 p. 17, 1. 2

*gandharvopamaḥ udaka-* とあるが、サンスクリット文法の上からいへば、「v 以外の母音の前では *as* は *av* なる<sup>(9)</sup>」はずと思ふ。ネール写本を調べて見ると、Ns 本 (16a, 1. 5) も Nc 本 (13b, 1. 6) も *gandharvopama udaka-* となつてゐる。従つてこのは文法的にも、またネール写本の上から *ōpamaḥ udaka-* は *ōpama udaka-* と訂正すべきである。

その直後の第二十偈の長行にある Lévi 本 p. 17, 1. 6~17 の *sarvasatvārthakriyārad* とあるが、Ns 本 (16b, 1. 1) は *nyaya* を不明瞭とあるが、*sarvasatvārthakriyānām tad-* の *ny* は *ny* の *ny* 本 (13b, 1. 9) では *sarvasatvārthakriyānām tad-* となつてゐる。従つて *kriyā* ではなく *kriyānām* といふ *pl.* G に誤つてゐる。この *ny* はチベット訳 *don bya ba rnam de la* (影田北京版 92-1-8、チルゲ版 141b) となつてゐるが、*ny* の *ny* 本 (13b, 1. 9) では *sarvasatvārthakriyānām kriyānām* と訂正すべきである。

同じく第二十偈の長行の Lévi 本 p. 17, 1. 9 の *aryakṣayamatistūre 'kṣagātānūsāreṇa-* は宇井博士が「梵文は *akṣagata* とあるのがよく似た判ひなう」(宇井博士著本 101 頁参照) となつてゐる個所であるが、Ns 本 (16b, 1. 2) も Nc 本 (14a, 1. 1) も *'kṣayatā* となつてゐる。チベット訳 *mi zad pa rid* (影田北京版 92-1-8、チルゲ版 141b) となつてゐる *sk. akṣayatā* と一致するから、この *akṣagatā* は *akṣayatā* と訂正すべき



dan gshan gyi (影印北京版62—5—7、テルゲ版143a)となつてゐる。de [ni] と sa には相当する語が入つてゐる。それ故に tatha hi の後へ sa を入れて tatha hi sa と訂正すべきであらう。

以上の如く、『大乘莊嚴經論』の発心品では、Lévi 本のテキストの上に数多く訂正すべき点が見出されるが、これ以外の訂正すべき点は Lévi 自身が『莊嚴經論』の仏訳を出版するときの指摘してゐる、またそれらをも含めて長尾博士の一覽表が Index の Part One の初めに発表されてゐるから、これによつてテキストを正しく読むことができる。また宇井博士の訂正や Bagchi の訂正もあるが、今はなるべく誰も指摘していない個所で訂正すべき点を、第四章発心品を中心に論じたにすぎない。

- 1 S. Lévi: Mahāyāna-sūtrālamkāra, Tome 1, 1907. p. 14
- 2 漢訳に「後三地」(大正三三 五九五〇)とあるから、八地九地、十地と解した。
- 3 S. Lévi 本 p. 14, 1.17 参照。
- 4 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」五九八頁参照。
- 5 チベット訳のテルゲ版が drug pa となつてゐるが、萩原博士は hzung pa とはなすかと云はれるが、(Bodhisattvabhūmi p. 85 脚註) 北京版では sgrub pa (影印北京版154-1-3) となつてゐる。
- 6 U. Wogihara: Bodhisattvabhūmi p. 84, 1.21~p. 85, 1.4. 影印北京版154-1-1、大正三〇 四九八 a 参照。
- 7 U. Wogihara: Bodhisattvabhūmi p. 367, 1.1 参照。 影印北京版219-3-5 (テルゲ版189b)

『大乘莊嚴經論』発心品の一考察(舟橋)

- 8 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六〇〇頁参照。
- 9 Lévi 本 p. 15, 1.15 参照。
- 10 上の偈は Arya 調の偈であるが dasamahapranīhāna の音では韻律が合わないが (UUUU—UU—) となるため、pranīhāna-mahādāsa (UU—UU—) としたと考へられる。
- 11 Lévi 本 p. 15, 1.28 参照。
- 12 Kondo: Dasahmitṣvaro Nama Mahāyānasūtram p. 22. 1.7. 龍山章真氏「梵文和訳十地経」三〇頁参照。
- 13 Kondo 本 p. 22, 1.9 参照。
- 14 大正一〇 五三九 b 参照。
- 15 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六〇一頁参照。
- 16 Ns 本 'ksayata (16b, 1.2) Nc 本 'ksayata(14a, 1.1) mi zad pa hid (影印北京版62—2—8) となつてゐる。sk. aksayata と致す。
- 17 Nagao: Index to the Mahāyāna-sūtrālamkāra Part One xii: 1, 19 参照。
- 18 J. Gonda: サンسكريット語初等文法 p. 17 参照。
- 19 萩原雲来編「梵和大辞典」によると、utsahan に「精進」の訳があるが、sūtr. (莊嚴經論) とあるから、この使用例に基づいてゐるものと思われる。莊嚴經論にはこの一例しかないが、sūtr. が udyaman と訂正される、この例の sūtr. は削除したくはない。
- 20 この偈文の utsaha (uyama に訂正) を長行では vīrya と置き換へてゐるが、これは偈頭の韻律を合わせるため、vīrya ではシラブルが合わないからであらう。この vīrya のチベット訳は brson hgrus pa (影印北京版62—5—9、テルゲ版143a) とある。
- 21 S. Lévi: Mahāyāna-sūtrālamkāra Tome II. 1911. p. 32-p. 43 脚註参照。
- 22 Nagao: Index to the Mahāyāna-sūtrālamkāra Part One 1958.

△キワード√菩薩の発心、大乘莊嚴經論、発心の差別 (昭和63年度文部省科学研究費一般研究Cの成果の一部) (大谷大学助教)